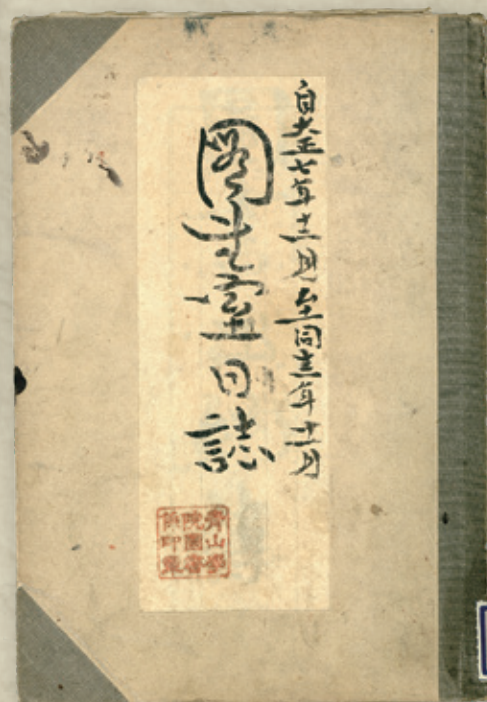
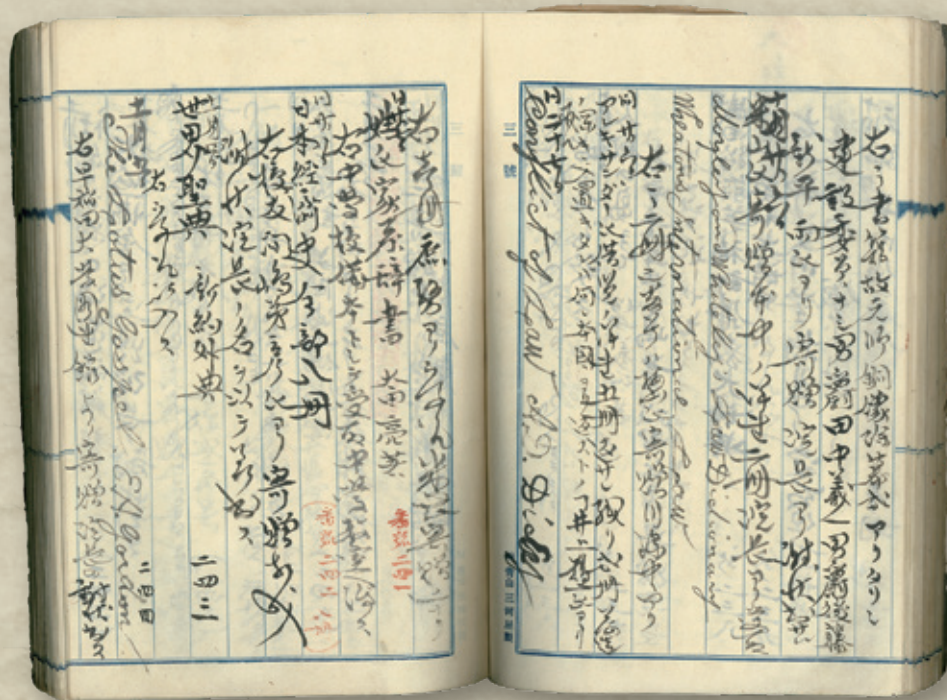


Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより **24** 号



「図書室日誌」 1918 (大正7) 年12月～1924 (大正13) 年11月

青山学院高等学部図書室の業務日誌で、事務的な内容の他、図書の購入や寄贈など資料収集の過程についても記述されている。当時、学院には各学部（神学部、高等学部、中学部）校舎ごとに小規模ではあるが図書室が設けられていたが、関東大震災により破損してしまった。その後1926年に竣工した中学部、高等学部の新校舎（現1、2号館）の一部に再び図書室が設けられたが、各学部が共用できる学院の中央図書館の実現が切望された。そこで図書館建設の寄付を申し出た校友 間島弟彦の遺志を継いだ愛子夫人の寄付により1929年10月に間島記念図書館（現 間島記念館）が完成した。今年は間島弟彦の生誕150年にあたる。

青山学院史探訪

中学部生徒が記録した終戦前後の青山学院

— 石川靖夫氏の日記から — 佐藤隆 — 2

資料センター所蔵資料紹介

守り続けてきた「児童文集」づくり 小林寛 — 4

資料センター利用状況・日誌抄 — 6

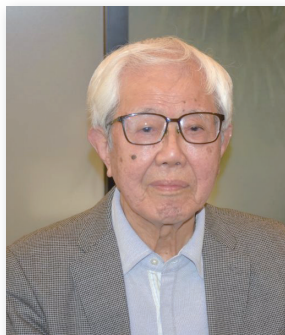
受入れ資料 — 7

利用案内ほか — 8

「中学部生徒が記録した終戦前後の青山学院

——石川靖夫氏の日記から——

高等部地理歴史科教諭 佐藤 隆一



いしかわやすお
石川靖夫氏近影

アジア太平洋戦争末期の敗色が濃くなった1945年（昭和20）3月18日、日本政府は全学校を食糧増産・軍需生産・防空防衛など決戦のための業務に総動員させる閣議決定をし、全国の学校は授業よりも勤労作業

や軍事教練を最優先する非常事態となった。青山学院も例外ではなく、度重なる米軍機の空襲のなかで苦難に満ちた教育活動を余儀なくされた。

ここにご紹介する校友の石川靖夫氏は、1932年（昭和7）9月に東京都品川区に生まれ、1945年（昭和20）4月に青山学院旧制中学部に入学、1948年（昭和23）3月卒業、同年4月に青山学院旧制高等部に入学、1951年（昭和26）3月卒業後は青山学院大学商学部（現在の経済学部）に進学、1955年（昭和30）3月卒業後、社会人として精力的に活躍される一方、1980年（昭和55）に発足した昭和26年卒業生の旧制高等部同窓会「二六会」の中心的役割を担われ、機関紙『「二六会」会報』の編集などで長年にわたり貢献された方である。

また、石川氏は現在広く使用されている青山学院大学の校章デザインの考案者である。1952年（昭和27）に学院の常任委員会が新バッヂの意匠を募集したところ、30余の募集作品の中から選ばれたのが、当時大学商学部2年生の石川氏の



青山学院大学校章の
デザイン
(石川靖夫氏の作品)

作品であった。信仰を象徴する盾の囲いの中に「A」と「G」がそれぞれ斜め上を向き、「Univ」が水平方向に並ぶというバランス感覚豊かなモダンなデザインであり、今や青山学院の代表的なシンボルマークとなっている。

さて、石川氏は終戦をはさんだ旧制中学部生の時期に、若年ながらしっかりと内容の日記を書き残されており、大切に所蔵されている。その主なものは、「勝ちぬく日記」（1945年）、「少国民日記」（1945～1946年）、「日記」（1945年）、「生活反省日記」2冊（1946年）、「diary」（1947～1948年、1949年、1950年）3冊、「修学旅行」（1950年）、などである。また、大学時代は写真部に所属され、自ら撮影された青山学院関係の写真も所蔵されている。

これらは注目すべき歴史的遺産であり、石川氏は私のインタビューにも快く応じて下さり、日記類や写真などをお持ちになり、学生時代の思い出を雄弁に語ってくださっている。

そこで、今回は終戦前後の貴重な記録である「勝ちぬく日記」の一部をご紹介します。「勝ちぬく日記」とは、戦況が悪化した日本がいつかは形勢を挽回して必ず勝利するという、中学校1年生の靖夫少年の固い信念が込められていた。これらはB5版くらいの用紙に1945年7月20日から12月20日までの記事がペンで清書され、保存状態が大変良好である。

まず、米軍機が頻繁に襲来した戦争末期の7月31日の記事は次のようにある。

学校（中学部）へつくとすぐ授業が始まった。漢文・地理・習字・修身などをやって帰へりに僕は副班長ときまり木曜・金曜と週番になることになった。僕は門衛にあたった。明日から十日間学校で教練することになった。又小松先生（小松完一）が戦陣訓をあんしょうしてこいといだったので帰へって来て戦陣訓の本をさがしてもないので、信ちゃん（近隣の1年上級の生徒）にかりて来た。

同日は授業があったが、次の日からは10日間は軍事教練をすることになり、担任の先生から戦陣

訓（戦時の心得）を暗唱する課題が出されるなど、戦時体制一色の様子である。

そして敗戦を迎える8月15日の出来事を、石川氏は印象深く日記に書き残している。

朝、重大放送があると夜ラジオでいったが、正午にのびた。重大放送なので学校を休んだ。正午になると、義隆ちゃん（従兄弟）がきて「戦争が終るんだ」といったので、僕はびっくりして本当かなーと思っていると、やがて正午になる。天皇陛下御自ら御放送あそばされるときいたので、こんなことは我国始って以来初めてのことなので、おそれ多い事だと思ひ、父と母と自分と義隆ちゃんと宮城の方をむいて立った。やがて天皇陛下の御声を聞いて思はず涙が出た。

日本の勝利を信じてやまなかった靖夫少年にとって、玉音放送を聞いたことで、自分の信念の歯車が狂ってしまったような衝撃と落胆に満ちた心境がうかがえる。

また、6日後の8月21日の日記の記事は次のようにある。

学校で一年から四年迄の生徒が集って院長先生（小野徳三郎）・部長先生（村上精一）の今後の方針を聞いてかへって来た。今までにかんづめ・かんぱん・するめなどいろいろ配給になった。戦争のためとてをいてあったのだろう。有難くいただく。又天皇陛下より灯火を明るくし、娯楽機関を復興してよいといふ有難たいお言葉があった。

以後最初の登校日は9月17日で、同日記には

学校へ9時までに行った。お話があって中学部は今度二部教授となって午後からになってしまった。

とあり、高等女学部校舎を午前中は高等女学部が、午後は男子の中学部が使うという二部授業となる連絡がされている。

翌18日に授業がはじまるが、同日の日記には次のような記事がある。

午前中時間割をそろへたりなどして午後から信ちゃんといっしょに学校へいった。今度僕たちの先生は岡野先生（岡野勇治）といってとてもよい先生だ。教室へ行くと二学期の級長・

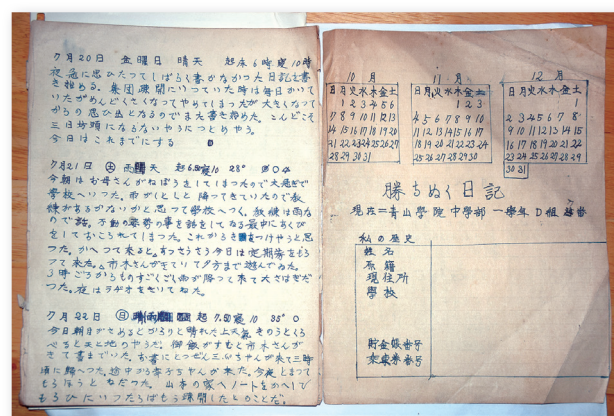
副級長の選挙をやった。まさかと思ったら僕が十二票で二番目になってしまった。一番は十三票で沢田、三番はもと級長の北村で十一票となった。僕は副級長らしい。どうも心配だ。帰りに岡野先生が選挙の上の方の七人を残して色々お話しして下さった。かへってくると畠へいってお母さんに副級長になったことをいったらとてもよろこんだ。

さらに1か月以上が過ぎた10月25日の日記には、学院内での大変面白い記事がある。

学校の帰り学院の中に小型トラックがはいって来た。中にはアメリカ人がのっていた。僕たちは渋谷まで乗っけてもらはうとして「ストップストップ」といったらば、止った。だれかが「渋谷ステーション」といふと「ノウノウ右左」と日本語で言ったので皆んな大笑をした。僕等が「左」といふと「私右」といって行ってしまった。

アメリカ人を相手に片言で会話をする、少年たちの年相応のやんちゃぶりが見て取れる。

さて、米寿をお迎えになった石川靖夫氏は至ってご壮健で、同窓生と頻繁に交流を続けながら毎日の生活を楽しんでおられる。今回、「勝ちぬく日記」を丹念に拝読し、筆者ご本人に度々インタビューをさせていただいたことにより、76年前の中学部における学生生活の様子が鮮明によみがえった。この日記は戦中・戦後の社会の急激な変転を、教職員や社会人ではなく生徒の目から生き生きと記録したもので、極めて貴重な史料である。



石川靖夫氏「勝ちぬく日記」

守り続けてきた「児童文集」づくり

初等部教諭 小林 寛

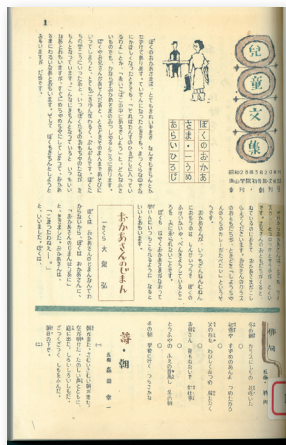
毎年、夏を迎えるころに、子どもたちに届く文集がある。「児童文集」である。

低学年の「じどうぶんしゅう」には1、2年生の作品が掲載され、高学年の「児童文集」には3年生から6年生の作品が掲載される。

2020年度のは、「じどうぶんしゅう」が143ページ55作品、「児童文集」が208ページ67作品となった。児童が書いた作文の中から選ばれた作品が掲載される。内容は生活文から紀行文、調べ物作文、読書感想文、創作文と多岐にわたる。それぞれの作品の選出理由を解説している「見どころ読みどころ」も巻末に付けられている。

この「児童文集」の創刊第1号は1953（昭和28）年3月2日に発行されている。終戦から8年目、現在のように製本されたものではなく、わずかA4の両面刷りが3枚ほどの小冊子であった。それでも1年生から6年生の作文が10作品、俳句・詩・創作文も加えて掲載されバラエティに富んだものになっている。今日まで続く「児童文集」の原型がここにあると言えよう。発行は青山学院初等部文化部。

あとがきに次のような言葉があった。「図画は年に春と



「児童文集」創刊第1号
(1953年3月2日)

秋の2回の写生会をしたり、東横デパートで展覧会まで開きました。音楽は講堂の落成を記念して、あんなに立派な音楽会ができましたね。けれども作文についての発表がなかったのは寂しいことでした。でも、かわいい文集がやっと生まれました。まだ生まれてないので名前は仮の名前で。どなたかスッカリした良い名前をつけてやってください。これから毎学期発行の予定でございます。」

その後、第2号が1953（昭和28）年7月に、第3号が同年12月に発行されている。

日本の作文教育は以下のような変遷を辿っている。

奈良教育大学の増田信一氏が雑誌「研究と教育」にまとめた「作文教育史における『作文』と『綴り方』」から引用する。

日本における作文教育は生活綴り方を元にして生まれてきた。1900年の「小学校施行規則」に「綴り方」が登場し、この言葉は昭和22年学習指導要領試案で「綴り方」を「作文」に変更するまで続いた。東京高等師範附属小学校の

訓導であった芦田恵之助の「綴り方教授」と大正期の雑誌「赤い鳥」に鈴木三重吉が投稿作文を呼びかけたことが、子供の自発的的作文を書かせるきっかけとなった。その後、綴り方運動は東北で独自の発展を迎え雑誌「北方教育」は東北独自の生活綴り方に発展する。1934年には北日本教育連盟が結成されたが、戦争遂行のための反国家分子である左翼思想が含まれていると弾圧される。

戦後は占領軍による「新教育」の旗のもと学習指導要領の試案で「綴り方」を「作文」と変えた。また、教育界ではコア・カリキュラム運動が盛んになった。コア・カリキュラムは特定の領域や問題を核として、教科の総合をめざす教育課程である。

このコア・カリキュラムが作文教育の後押しをすることになる。

コア・カリキュラムの代表的存在であった「明石プラン」（『教育実践の新段階』神戸大学教育学部附属明石小学校1953年）の「中心課程」の考え方が広まった。

1950年に「日本綴り方の会」が設立、翌年に「日本作文の会」と改称。それでも無着成恭の「山びこ学校」で再び生活綴り方という考え方が息を吹きかえした。（以上抜粋）

初等部の前身である緑岡小学校は1937（昭和12）年に創立。戦争の荒波に耐え1946（昭和21）年に晴れて青山学院初等部と改称される。その7年後に児童文集が創刊されている。これは「明石プラン」や「日本綴り方の会」設立より前である。初等部の作文教育は、時代の流れに一步先んじて生まれたものだった。

創刊第1号に掲載された作品を見てみよう。

最初の作品は、あらいひろじさん（1年生）の書いた「ぼくのおかあさま」である。とても綺麗好きでなんでもきちんと片付けないと気が済まないお母さんを誇らしく思っている。それに続く大泉弘さん（1年生）も「おかあさんじまん」、黒板玲子さん（4年生）も「お母さん」のこと、田中伸幸さん（4年生）が「ぼくの弟」。太宰美南子さん（5年生）は「失敗」の中で父親のことを書いた。ここまで家族が題材になっている。その後「ラグビー」（阿部徹也 4年生）、「猫と犬」（酒井勝人 2年生）、「ピヨちゃん」（富田万城子 3年生）、「顔」（谷口牧子 6年生）と続いている。

創刊号の作品を読むと、子どもが自発的に書く題材を見つけ、書くことで自分の生活や自分を取り巻く人々を見つめ、自分の考えを高めていることが読み取れる。

この編集姿勢は金子書房が発行した『生活綴り方と作文教育』（1952（昭和27）年6月発行）の一文に共通する。[生

活綴方という運動は綴り方によって生活を勉強するという標語を掲げて始められた。」(周郷 博)と冒頭に記されている。おそらく同様の考えが初等部の中でも支持され、「児童文集」という形になって現れたのだろう。

自分を取り巻く人物や出来事を見つめ、それを題材に作文を書くことは「綴り方によって生活を勉強する」に沿ったものであり、現在の初等部の作文教育にも続いている。

一体、この創刊に関わった教師は誰であったのか、興味はそこにいく。

「児童文集」を立ち上げた人物を探ろうと青山学院初等部50年のあゆみをまとめた『信仰の盾にまもられて』を紐解いた。資料編を見ると1953(昭和28)年に初等部に在籍していた教員は小宮山伍助部長以下24名、1学年2クラス全12学級の時代であった。担当教科の欄に理科・音楽・図工・体育・英語、それに養護については記載しているが担任に専門教科の記載はない。多くの詩歌を残し今も初等部生が愛唱している「しろいほうし」の作者高村喜美子先生も在籍されており、きっと中心的な役割を果たされていたのではと推察するが、先に紹介した編集後記の全文にも「青山学院初等部文化部」とあるだけで個人の名はない。そのあとがきも3号でなくなっており、その後も児童名以外の個人名は記載されていない。

それでも、毎号1年生から6年生までの子どもたちの作品が網羅的に掲載されているところを見ると、全担任関わったと思われる。きっとどのクラス担任も自分のクラスの作文を読み返し、作品選びに苦労したに違いない。それは、70年経った今でも

続いている「児童文集」づくりの一番大切で大変な作業である。

編集責任者名の記載がないのは、何人かの個人が作り上げたものではなく、初等部の教師全員で立ち上げた文集だということを意味しているのではないだろうか。



「児童文集」1962年10月号 表紙

さて、本学院資料センターに所蔵されている「児童文集」は1962(昭和37)年度のものからとなる。低学年編(1、2、3年生)と高学年編(4、5、6年生)に分冊されそれぞれにページ数も100ページを超える立派なものとなっている。

奥付がある。「昭和37年10月15日発行 青山学院初等部低学年文集 製版・額賀 川島 印刷・座間工房」と記載されている。翌1963(昭和38)年の上学年文集には「印刷・神奈川県座間町額賀」とある。

当時、学校での印刷といえば謄写版(ガリ版刷り)が主流であった。謄写版とはパラフィン氏などの薄紙にワックスを浸透させたロウ原紙を専用の鉄筆で引っ掻くことで

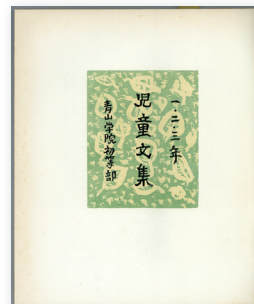
凹凸をつけ、そこにインクを浸透させ用紙にローラーで押し付ける印刷方法である。鉄筆がガリガリ音を立てることから「ガリ版」と呼ばれ、ガリを切る(鉄筆で文字を書く)人の字体が色濃く反映された。

「児童文集」を創刊号から見返すと、同じ筆跡が貫かれていることに気づく。几帳面さと温かみが不思議と同居する美しい文字である。ガリを切った人の人柄が伝わってくる。

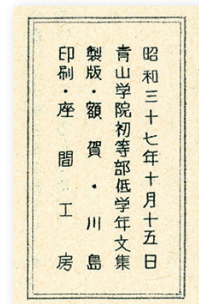
題字はまるで毛筆で書いたように一画一画の線の幅に変化がある。本文は一文字一文字が全て同じ3ミリ四方のマスの目の中にきっちりと納められている。さらにルビに至ってはその文字の半分以下のマス目の中に書かれている。一体、どれほど繊細に鉄筆を動かしていたのか。この文字数を書き上げるのにどれだけの時間がかかっていたのか。想像するだけで気が遠くなる。

ガリを切っていたのは神奈川県座間市に印刷所を構えていた版画家の額賀保羅氏であった。本文は、後年三青社の活字になるが、文集の表紙および扉の印刷を長い間、額賀氏が請け負っていた。(『信仰の盾にまもられて』より)

子どもの作文集を作るにあたって当時の教員が額賀氏に依頼したのは、高い美意識があつてのことと推察できる。子どもの言葉を美しい文字で文集にまとめる志の高さを見て取れる。



「児童文集」1962年10月号 扉



「児童文集」1962年10月号 奥付

創刊当時のことを初等部の現任教員ですら既にも知らないが、「児童文集」を発行し続けたことで初等部の教育が一本筋の通ったものになったと言えるのではないかな。

ガリ版はワープロを経てコンピュータになった。子どもたちも鉛筆を使いながらすでにキーボードで文字を打つ生活に入りつつある。それでも、子どもたちがより良くなりたい、成長したいという意欲には変わりはない。

そのためには、子どもたちが自分と自分を取り巻く人々や社会を見つめ学ぶことが不可欠であると信じている。だからこそ、毎年担任が子どもたちの作文を丁寧に指導し、その中からこれは文集に残し、みんなに読んでほしいと思う作品を選ぶ作業を続けてきたのだ。

そのことを忘れてはならないと70年間に渡って初等部の教師を叱咤激励してきたものが「児童文集」づくりだったのかもしれない。

資料センター利用状況等 (2020 年度後期利用状況)

※新型コロナウイルス感染拡大に伴う学院施設入構制限措置により、展示ホール臨時休館中

1. 月別利用者数 () 内は前年度の数

		10月		11月		12月		1月		2月		3月		計	
展示見学者数		12	(152)	11	(293)	3	(134)	13	(199)	0	(27)	48	(82)	87	(887)
資料閲覧者数		3	(20)	5	(10)	2	(7)	3	(9)	3	(0)	2	(5)	18	(51)
閲覧者の区分	本学学生	0	(7)	0	(1)	1	(3)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	1	(12)
	現教職員	3	(5)	3	(3)	1	(1)	3	(0)	3	(0)	2	(2)	15	(11)
	旧教職員	0	(1)	2	(0)	0	(1)	0	(2)	0	(0)	0	(0)	2	(4)
	校友	0	(3)	0	(2)	0	(0)	0	(1)	0	(0)	0	(1)	0	(7)
	他大学教員	0	(1)	0	(1)	0	(0)	0	(4)	0	(0)	0	(1)	0	(7)
	牧師	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(1)
	一般	0	(3)	0	(3)	0	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(1)	0	(9)
利用の目的	教会史編集	1	(0)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	2	(1)
	学校史編集	0	(1)	1	(0)	0	(0)	0	(1)	0	(0)	0	(2)	1	(4)
	著述・論文作成	1	(8)	1	(2)	2	(4)	3	(4)	2	(0)	0	(2)	9	(20)
	伝記資料調査	0	(4)	1	(1)	0	(2)	0	(0)	0	(0)	1	(2)	2	(9)
	記録類の調査・研究	0	(4)	1	(0)	0	(0)	0	(3)	0	(0)	0	(0)	1	(7)
	その他	1	(3)	1	(7)	0	(1)	0	(1)	1	(0)	1	(1)	4	(13)
資料の種類	青山学院史関係 (AA)	2	(9)	3	(1)	1	(4)	0	(5)	3	(0)	0	(0)	9	(19)
	メソジスト教会関係 (B)	2	(1)	1	(2)	0	(1)	1	(0)	0	(0)	0	(2)	4	(6)
	英語・英文学関係 (IIF)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	明治期キリスト教関係 (IBG)	0	(8)	1	(0)	0	(0)	2	(2)	0	(0)	0	(1)	3	(11)
	一般分類図書	0	(1)	1	(2)	1	(3)	0	(2)	0	(0)	2	(1)	4	(9)
	その他	0	(1)	0	(5)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(1)	0	(8)
資料の形態 (閲覧点数)	図書	8	(53)	16	(74)	5	(48)	17	(45)	16	(0)	3	(16)	65	(236)
	マイクロフィルム	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	写真 (含ネガ)	0	(3)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(1)	1	(4)
	アルバム	0	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(0)
	個人資料ファイル	0	(2)	0	(2)	0	(29)	0	(5)	0	(0)	0	(0)	0	(38)
	ビデオ・DVD等	0	(0)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(1)
	その他	0	(34)	0	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(35)

※利用の目的・資料の種類は重複回答あり

2. 月別レファレンス件数 () 内は前年度の数

		10月		11月		12月		1月		2月		3月		計	
件数		7	(18)	10	(10)	7	(9)	5	(7)	7	(11)	5	(7)	41	(62)
質問者の区分	学生	0	(1)	0	(0)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(2)
	現教職員	5	(8)	7	(3)	2	(5)	1	(6)	5	(7)	4	(4)	24	(33)
	旧教職員	0	(0)	0	(0)	0	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	1	(2)
	校友	0	(1)	1	(3)	0	(0)	1	(0)	1	(1)	0	(1)	3	(6)
	一般	2	(8)	2	(4)	4	(2)	2	(0)	1	(3)	1	(2)	12	(19)
質問内容	文献所蔵調査	1	(5)	2	(1)	2	(1)	2	(1)	4	(2)	1	(3)	12	(13)
	写真所蔵調査	1	(4)	4	(3)	1	(3)	2	(2)	2	(2)	2	(2)	12	(16)
	事項調査	5	(6)	4	(6)	4	(4)	0	(4)	1	(6)	2	(2)	16	(28)
	その他	0	(3)	0	(0)	0	(1)	1	(0)	0	(1)	0	(0)	1	(5)

3. 日誌抄



2020年10月

- ・青山スタンダード科目「青山学院大学の歴史」教材動画撮影
- ・青山スタンダード科目「青山学院大学の歴史」受講生、展示ホール見学のため臨時開館 (10/12~11/13)
- ・中等部新任教員、展示ホール見学
- ・展示検討小委員会開催
- ・第2回資料センター運営委員会開催
- ・書庫空調機不具合のため点検
- ・他部署主催会議に出席 2回

- ・大学教授来室 (150年史編集のため) 5回

11月

- ・横浜英和学院理事長・中高校長、展示ホール見学
- ・鎌倉国宝館館長・学芸員、来室
- ・2020年度AOYAMA VISION研修会に出席
- ・サーバント・リーダーシップ研修に出席
- ・創立記念礼拝に出席
- ・書庫空調機点検
- ・事務所の網戸設置工事
- ・他部署主催会議に出席 4回
- ・大学教授来室 (150年史編集のため) 4回

12月

- ・歴史資料館検討WG (第2次) 開催

- ・『Aoyama Gakuin Archives Letter』23号発行
- ・考古学資料室（ウェスレーホール）視察
- ・青山学報編集委員会に出席
- ・大学入学共通テスト業務説明会に出席
- ・他部署主催会議に出席 2回
- ・大学教授来室（150年史編纂のため） 4回

2021年1月

- ・大学附置青山学院史研究所設置準備委員会に出席
- ・520教室保管資料移設のため女子短期大学視察
- ・渋谷区郷土博物館・文学館館長、来室
- ・博物館実習（大学文学部史学科）にて展示室4を利用（1/26～2/1）
- ・構内遺跡展示資料を大学文学部史学科に返却
- ・大学入学共通テスト応援業務
- ・他部署主催会議に出席 2回
- ・大学教授来室（150年史編纂のため） 4回

2月

- ・押絵雛展示（2/22～4/30）

- ・展示ホール学院変遷図更新
- ・大学入試業務
- ・他部署主催会議に出席 1回
- ・大学教授来室（150年史編纂のため） 4回

3月

- ・「2019年度寄贈資料展」開催（3/18～4/30）
- ・佐賀県立美術館学芸員、来室
- ・地域アーカイブ構築論の授業準備のため非常勤講師、展示ホール見学
- ・大学史資料協議会研究会（於：印刷博物館）に出席
- ・展示検討小委員会開催
- ・青山学報編集委員会に出席
- ・デジタル化依頼資料、納品
- ・「青山学院大学附置青山学院史研究所」サイン表示取付
- ・大学学位記配布応援業務
- ・他部署主催会議に出席 2回
- ・大学教授来室（150年史編纂のため） 5回

2020 年度後期受入れ 資料

（学内部署からの資料は除く）

寄贈（敬省略、受入順）

金井守

- 『生江孝之先生と敬愛寮』金井守著 私家版 2020年1月
- 「敬愛の園」第148号 社会福祉法人敬愛会70周年記念号 2020年

佐藤晟雄（校友）

- 「わたしのスケッチブック」(20) 佐藤晟雄著 2020年11月15日

小林哲夫

- 『大学とオリンピック 1912-2020』小林哲夫著 中央公論新社 2020年10月10日

伊藤弘子（校友）

- 卒業証書 青山学院女子短期大学文科英文専攻 鈴木弘子 昭和27年3月21日

学校法人フェリス女学院歴史資料館

- 『フェリスのあゆみ 年表と写真でたどる150年』フェリス女学院150年史編纂委員会 学校法人フェリス女学院 2020年9月30日

伊藤美奈子（学校法人横浜英和学院理事長）

- 『未来への架け橋 横浜英和学院創立140周年記念誌』創立140周年記念誌編集委員会 横浜英和学院 2020年10月28日

下河邊史郎（校友）

- 「緑ヶ丘通信」No.123 青山学院大学山岳部OB・OG会 2020年4月20日
- 「緑ヶ丘通信」No.124 青山学院大学山岳部OB・OG会 2020年8月30日

学校法人八代学院

- 『神を畏れ人を恐れず人に使えよ 学校法人八代学院創立の道「八代斌助資料集③」』八代学院創立者逝去50年記念式典委員会 2020年10月

武藤元昭（校友・元大学長・大学名誉教授）

- 青山学院高等部50年記念式典式次第 1999年11月20日

俣野善彦（校友）

- 青盾会事務局ファイルNo.1～No.9 1994年～2015年

日向玲理（大学文学部助手）

- 間島弟彦から室谷鉄腸宛書翰 1926年1月23日 宛名封筒付（次頁写真①）
- 間島弟彦から室谷鉄腸宛書翰 1926年5月6日 宛名封筒付
- 間島弟彦から室谷鉄腸宛書翰 1926年12月9日 宛名封筒付

青山学院大学文学部英米文学科同窓会

- 会報「Aoyama Sapience」第44号 青山学院大学文学部英米文学科同窓会 2020年12月15日

稲葉明子（職員）

- 青山学院高等部創立50周年記念 携帯用クロック 1999年
- 遠藤真名美（校友・職員）

- ASAC (Aoyama Gakuin Senior high school Alpine Club) 新人強化合宿 山行計画書（電話連絡網付き） 1980年5月10日

中川卓郎（校友）

- 「グリーンハーモニー OB NEWS」No.62 2020年12月

岩見慎一（有限会社エアロベース）

- 模型 1/48 文部省式1型滑空機（エアロベース製）（次頁写真②）

松本涼子（校友・職員）

- 幼稚園「お知らせ」 1969年4月～1970年3月
- 幼稚園「給食こんだて表」 1969年4月～1970年3月

山本与志春（院長）

- 「平和とともに 大澤英二」公益財団法人山梨YMCA

2020年11月20日

大森秀子（大学教育人間科学部教授）

- 「アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育-青山女学院の場合-」青山学院大学教育学会紀要「教育研究」第65号 抜刷 2021年3月1日
- 青山学院大学教育学会紀要「教育研究」第65号 2021年3月1日

山本美紀（大学教育人間科学部教授）

- 「児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ-青山学院所蔵6誌の目次と改題-」青山学院大学教育学会紀要「教育研究」第65号 抜刷 2021年3月1日

滝澤民夫

- 「増野悦興の晩年の『日記』と日本基督教同仁教会（一）」同志社大学同志社談叢四十一号 抜刷 2021年3月1日

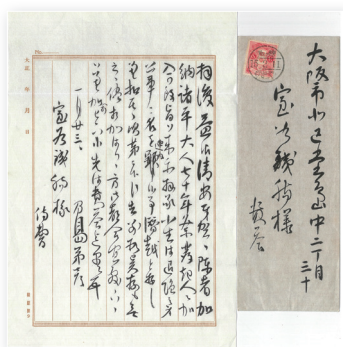
他大学・学校

- 年史・紀要類

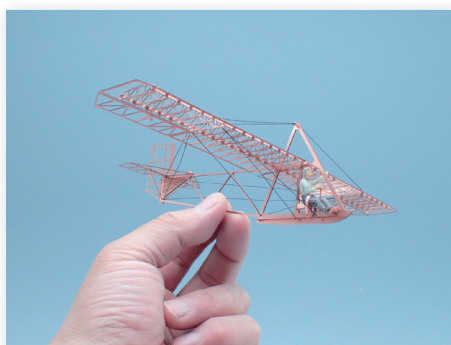
購入（受入順）

- 『基督教と現世生活』山田寅之助著 警醒社書店 1908（明治41）年5月8日（写真③）

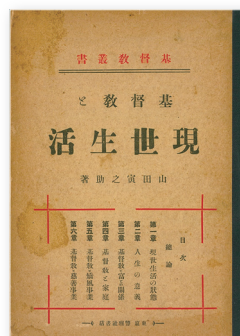
- 『日曜世界』第14巻第5号、第16巻第6号・第8～11号、第17巻第1～3号・第5号 日曜世界社 1921（大正10）年5月、1923（大正12）年6月・8月～11月、1924（大正13）年1月～3月・5月（写真④⑤⑥⑦）



写真①「間島弟彦から室谷鉄腸宛書翰」宛名封筒付



写真②「模型 文部省式1型滑空機（エアロベス製）」



写真③『基督教と現世生活』



写真④『日曜世界』第14巻第5号



写真⑤『日曜世界』第16巻第10号



写真⑥『日曜世界』第16巻第11号



写真⑦『日曜世界』第17巻第3号

青山学院資料センター利用案内

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大に伴い、現在、学院施設入構制限措置がとられております。そのため、以下にご案内しております資料センター展示ホールは当面の間、臨時休館といたします。また、資料閲覧につきましても休止とさせていただきます。

なお、再開日時が決まりましたら、ホームページにてご案内いたします。

●展示ホールの見学

青山学院史関係資料の常設展示を無料にて一般公開しています。お近くにお越しの際には、ぜひお立ちください。

公開時間 月～金曜日 ▼9:30～17:00（入館は16:30まで）
土曜日 ▼9:30～13:00（入館は12:30まで）

※夏期間（8/2～9/15）の公開時間は、9:30～16:00（月～金曜日）です。

●休室日

日曜日・国民の祝日・年末・年始・その他学院が定める休日
夏期間：一斉休業期間<8/4（水）～8/10（火）>、8/11、8/18、8/25の水曜日、8/14、8/21、8/28、9/4、9/11の土曜日

●資料閲覧

青山学院史、明治期キリスト教関係資料などを公開しています。特定の研究目的を持って閲覧ご希望の方は、電話・FAX・メールにてご連絡ください。

閲覧時間（いずれも昼休み11:30～12:30）

月～金曜日 ▼9:30～17:00 土曜日 ▼9:30～13:00

※夏期間（8/2～9/15）の閲覧時間は、9:30～16:00（月～金曜日）です。

●問い合わせ

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 間島記念館2階

青山学院資料センター

TEL 03 (3409) 6742

FAX 03 (3409) 8134

メールアドレス ag-archives@aoyamagakuin.jp

青山学院ウェブサイトの中に資料センターのページがあります。こちらをご覧ください。

<https://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/index.html>

資料センター運営委員

院長（職務上） 山本与志春
常務理事1名（職務上） 楯 香津美
学院宗教部長（職務上） 伊藤 悟
大学図書館長（職務上） 野末俊比古
大学 教員1人 岩井 浩人

高中部（高） 教員1人 佐藤 隆一
高中部（中） 教員1人 森田久美子
初等部 教員1人 小林 寛
幼稚園 教員1人 石井 京子
総局長（職務上） 石黒 隆文
資料センター事務長（職務上） 岩本 智実

資料センタースタッフ人数

資料センター事務：

専任 3人

パートタイム 2人

（週4日：1人、週5日：1人）

『青山学院150年史』編纂業務：
大学附置青山学院史研究所

Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより 24号

青山学院資料センター編・発行
2021年7月27日発行



印刷：三美印刷株式会社
500部